

第1回 兵庫県地域創生戦略会議 企画委員会 議事概要

1 兵庫県地域創生戦略企画委員会 委員

氏名	所属・役職
赤澤 宏樹	兵庫県立大学自然・環境科学研究所教授
阿部 真大	甲南大学文学部教授
石川 路子	甲南大学経済学部教授
上村 敏之	関西学院大学経済学部教授
織田澤 利守	神戸大学大学院工学研究科准教授
定藤 博子	鹿児島国際大学経済学部専任講師
清水 陽子	関西学院大学総合政策学部教授
高根沢 均	神戸山手大学現代社会学部准教授
松原 永季	(有)スタジオ・カタリスト代表取締役 ※委員長
山下 紗矢佳	神戸山手大学現代社会学部講師
勇上 和史	神戸大学大学院経済学研究科准教授
横山 由紀子	兵庫県立大学国際商経学部教授

2 議事概要

【次期戦略で目指す姿】

- ・地域の元気の戦略目標がGDPとなっているが、住民にとって分かりにくい。
- ・KPIなどの数字は施策の結果でしかない。豊かなくらしをつくることが大事で、その結果数字が良くなればよい。
- ・戦略の目標は、住民に地域を自分のこととして考えてもらうこと。
- ・人口が減少しても暮らしやすい地域をどうつくるのかが目標となる。
- ・個性ある地域が自立することが地域創生のゴールではないか。
- ・東京VS兵庫では難しいが、東京VS関西では対抗軸となる。

【若者の地元定着】

- ・グローバル化やITの進展により、本来はローカルで活躍できるはずなのに、若者が流出するのは、地元企業を知らないからだ。
- ・兵庫は職の多様性が大きい。子どもたちに多様な職業を体験させることができるというのは兵庫の強みを活かせる。
- ・子どもへのふるさと教育は、地域巻き込み型の事業を中長期的に取り組むことで効用を生む。
- ・若い人の中には、給与が低くても自分がしたい仕事を複数行い楽しく暮らしたいという人がいる。こうしたことを企業が認める仕組みがあればよい。
- ・東京で人間関係に失敗して戻ってくる若者を受け入れる体制が必要だ。

【魅力あるまちづくり部会】

- ・学生にとってマイナビ・リクナビが企業情報を得る手段であり、掲載されていない地元企業の情報は大学生に届かない。

【若者定着・還流部会】

- ・ネットで情報収集しても、知っている検索ワード以上の情報は出てこない。
- ・暮らしの面でみると、地方の評価が高くなってきている。

【未来の担い手育成部会】

- ・小さい頃からの教育を通じて、地域への愛着を醸成することで関係人口づくりができる。

【地域特性に応じた取組】

- ・地域への愛着というのは所属意識が大切。兵庫県という単位では少し広すぎるのではないか。
- ・地域の特性を考えた区分が大切で、それに応じた施策が必要だ。
- ・地域を区分するのであれば、地域の文化や気候、住民の感覚に根ざした区分であれば、心にすっとんと落ちてくる。

【魅力あるまちづくり部会】

- ・各地域の中心性を見だし、そこを良くして他の地域に波及させていくことが大切。
- ・地域の人々が愛着を持てる、一体感を感じられる地域区分がよい。
- ・地域にあるものでつくり、地域で雇用を生む、ローカル経済圏をつくり、エリアをブランド化すべきだ。
- ・従来型の全ての地域に同じような施策展開ではだめだ。

【若者定着・還流部会】

- ・各地域での取組が似たようなものになっており、地域差がなくなっている。

【女性活躍】

- ・まだまだ、女性が活躍できていない。男女共同参画に関するメッセージを送り続けなければならない。
- ・都市部では比較的専業主婦が多いので、潜在的に人材はいると思う。
- ・家族観が強すぎると出生率が下がる。未婚や離婚など多様な家族のあり方を受け入れる風土をつくってはどうか。

【若者定着・還流部会】

- ・女性は個人毎のライフプランに応じ、様々なワークスタイルが必要となる。企業も働き方のバリエーションを提供できればよい。
- ・以前は女性を「主婦 or 働いている人」で定義づけしたが、現在は在宅勤務や週2～3勤務、NPO法人勤務など多様な働き方があり、安易に定義づけできない
- ・従前は「働く人」に対しアプローチをしてきたが、現在は、受け皿となる企業側に働きかけるようになってきた。

【未来の担い手部会】

- ・若年女性の転出は、大卒に見合うキャリアが地方にはないということだ。

【外国人の受け入れ】

- ・労働力不足だからといって短絡的に移民を受け入れると、孤立した集団をつくってしまう。
- ・留学生や高度人材など、外国人をひとくくりにするとだめだ。
- ・留学生に兵庫への愛着を持ってもらおうと世界中に兵庫の関係人口が増える。
- ・留学生に聞くと、兵庫は外国人にとって住みやすいと聞いている。そういった財産を活かせればよい。
- ・神戸は国際化の経験や国際性へのポジティブな感覚がある。

【未来の担い手育成部会】

- ・新たな在留資格も受け入れ上限は5年であり、定住・定着は前提にない。地域も「そのうち帰国する人」と認識しており、信頼関係を築きにくい。
- ・趣味や文化活動の集まりをつくり、外国人と日本人と一緒に楽しむことから始めると関係性をつくりやすい